



魚を食べる男の話



ぷらす

平田省吾は、大きなカメラを首から下ろし、
床に置いたリュックの上に乗せると、
定食屋のメニューを真剣な面持ちで眺めた。
次の入金まであと一週間、心許ない残金だけが頼りだ。
大学生活は雑誌編集部のアルバイトに明け暮れ、
卒業後はそのコネでフリーのカメラマンのような仕事をして
生計を立てているが、決して収入がいいとはいえない。
写真撮影には機材や消耗品などの金もかかるし、
取材のための交通費は自分持ち。場所によっては入場料を取られる。
何とか生活してはいけるものの、それだけである。
ここで一つ写真展の賞でも取ることができれば、
多少は名前にハクがつき、自分の作品の価値も上がるかもしれない。
そう考えて、被写体を求めて散歩している途中だった。
とはいえ、次に控えているコンテストの課題は人物フォト。
相手によっては礼金だって支払う必要があるだろう。
金銭的問題は常に省吾につきまとい、苦しめるのだ。

ふらふらと公園を散歩し、その足でオフィス街までやってきたところで、
空腹に気づいて、今というわけだ。腹が減っては戦はできぬ。
それなりの体格を有していることも手伝って、飯代だって馬鹿にならない。
つついメニューを睨む目にも力が入ってしまう。
唐揚げ定食にしようか、いや、煮魚定食も美味そうだ。
そう省吾が目移りしていると「お客様すみません」と店員に声をかけられた。
「お席の方が埋まってきてまして、相席をお願いできますか」
言われて省吾は店内を見渡す。
確かに繁盛しているようで、満席に近い状態だった。
長考を咎められるのかと身構えていた省吾は、ほっと胸を撫で下ろす。
「ああ、大丈夫っすよ」
「ありがとうございます。それではお次のお客様、こちらへどうぞ」
そう言って向かいに案内されて来た男は、スーツ姿のサラリーマンだった。
歳は四十前後だろうか。
グレーのジャケットに臙脂色のネクタイがよく似合っている。
「どうもすみません」
そう断って席についた男の物腰は柔らかく、
銀縁の眼鏡の奥には優しげな瞳。
何処と無く大人の余裕を感じさせた。
「焼き魚定食を」

メニューを見ることもなく、男は店員に注文を済ませる。

この店の常連なのかもしれない。

焼き魚定食かと、省吾は手元を確認する。値段もそう高くはないし、何より載っている写真の秋刀魚がとても美味しそうに見えた。

「あ、じゃあ俺も同じものを」

「はい、焼き魚定食2つ、少々お待ちください」

そう言い残して店員は立ち去る。

途端、省吾は自分の言動を省みて、しまったと思った。

連れ合いでもないのに注文に便乗したりして、失礼だったのではないだろうか。

いや、大した失礼でもないはずだが、

何だこいつ、程度には不快に思われたかもしれない。

省吾が恐る恐る顔を上げて相手の表情を盗み見ると、懸念に反して、男は何とも思っていないようだった。

省吾はその様子に安心したが、それも束の間、男の手元に視線を釘付けにされてしまった。

若い女性、それもティーン向けの雑誌だ。

パラパラとページを捲る彼の目は真剣そのもので、あまりのミスマッチさに省吾は呆気にとられる。

この人も雑誌関係の仕事なのだろうかと思ったが、編集部で長年出入りしている感覚からすると、どうも違う気がする。

一人は食い入るように雑誌を眺め、

もう一人はその様子をちらちらと伺う。

そんな妙な空間に割り込んだのは、

店員の「お待たせ致しました」という声だ。

どうやら魚が焼ける程度には、それなりの時間が過ぎていたらしい。

注文通り、焼き魚定食が2膳運ばれて来た。

向かいの男は雑誌を閉じて、1膳を受け取り、手を合わせる。

省吾もなんとなく習って手を合わせてから箸を取った。

旬の季節でもないというのに焼きたての秋刀魚は大変美味しく、

やはり常連らしき正面の男に便乗して正解だったと省吾は自画自賛する。

それにしても、と省吾は自分と相手との膳を見比べ、思う。

食べるうちに秋刀魚がぼろぼろに崩れていく自分と異なり、

向かいの男の食べ方のなんと美しいことか。

まるで漫画にでも出てくるかのように、魚の骨がそのままの姿で取り出され、身の一片も余すことなく食されていく。

自分の食べ方とどう違うのか、思わずまじまじと眺めてしまった。

「どうかしたかな？」

怪訝そうに顔を見られて、省吾は赤面する。

「あ、すみません、失礼な真似を」

「いや、構わないけれど、どうしたのかなと単純にね」

「すみません、ただ綺麗に食べるなあと思って。魚」

省吾は自分の皿を見て、その不器用さに恥ずかしくなった。

しかし男は馬鹿にすることもなく、「ああ」と静かに答える。

「魚の骨を抜くのは、ほぼ唯一とっていい私の特技なんだ。

何の役にも立たないけどね。大丈夫、君もそのうち上手になるよ」

そう柔らかく笑う男に、省吾の写真家としての心が動いた。

理由はわからない。ただこの男を撮りたいと、不思議と強くそう思った。

「あの、不躰なお願いで恐縮なんですけど」

「ん？」

「写真を撮らせてくれませんか。できれば食事をしている姿を」

そう省吾が頼むと、彼は言っている意味がわからないと表情で示した。

「.....どういうことかな」

当然の疑問だろう。我ながら怪しい。

省吾はそう思いながらも事情を説明する。

自分がフリーのカメラマンであることや、

応募を考えている人物写真のコンテストがあること、

そして貴方の食事をする姿に惚れ込んだこと。

本当に、どう考えても我ながら怪しい。

こういう時、フリーで仕事をしている人間は損だ。

どこか会社に所属でもしていれば、それなりの後ろ盾になるのに。

しかし、そんなことを考えていても仕方がない。

一体どうすれば信用してもらえるかと省吾は思案を巡らせる。

しかし、そんな省吾にはお構いなしに、正面の男は

「なるほど、そういう事情か」

と、驚くほどあっさり納得した。

「えっ？」

「そのカメラは目立つからね。

大きなカメラを持っているなど、ずっと思っていたんだよ」

そう示された男の指先には、省吾の愛機が鎮座していた。

なるほど自分には見慣れた存在ではあるが、

小さな定食屋にしてみればそれなりの存在感である。

「カメラマンというなら納得だ」

男は省吾が渡した名刺をまじまじと眺めている。

「信じていただけるんですか」

「まあ僕を騙しても仕方がないだろう。

若者の未来のためというなら協力したいところだけど、

申し訳ないが、写真に撮られるのは得意じゃなくてね」

雲行きが怪しい。断られる気配を察して、省吾は前のめりになった。

「どうしてもおじさんがいいんです。あ、いや、おじさんっていうか」

初対面でおじさん呼ばわりは失礼だろうと思いつつも、

お兄さんと形容する歳でもないと思いつつも、省吾は言葉を詰まらせる。

「いやいや、その通りだから別に構わないよ。

でも、こんなおじさんよりも良い人がいるだろう」

「どうしても駄目ですか。お時間は取らせません」

省吾はしつこく食い下がる。

「うーん、時間といってもね」

「一時間でいいんです。明日の土曜日とか空いてませんか」

「あー、それが申し訳ないが先約があってね」

「じゃあ日曜日とか」

「残念ながら日曜も……」

撮影する前提で話が進んでいることに、男は気づいていないらしい。

男は暫く思案して、「あ、そうだ」と手を打った。

「だったらこうしよう。交換条件というほどではないけれど、

僕の明日の予定に君が付き合ってくれないか」

今度は省吾が首を傾げる番だった。

「どういう意味ですか」

「実は日曜日、娘と会う日なんだ。別れた妻との子供」

別れた妻、という言葉に省吾は一瞬動揺したが、

今どき珍しくもないと意識的に気を静める。

「お子さんがいらっしゃるんですね」

「うん、三ヶ月に一度、面会日があってね。

それで今月は娘の誕生日があったから、

何かプレゼントも贈ろうと思ってるんだけど、

最近の若い子には何がいいのか皆目見当もつかなくて」

男は恥ずかしそうに読んでいた雑誌をテーブルに乗せる。

食い入るように見ていた雑誌はそういう理由かと、省吾は納得した。

「土曜に見繕って、日曜に渡すつもりだったんだ。

日曜の面会は夕方までだから、その後なら撮影に付き合うよ」

「それをお願いします」

省吾は二つ返事です承した。

まさか了承してもらえとは、ダメ元でも言ってみるものである。

その日は連絡先を交換して別れた。

牧村康弘。それが彼の名前だった。

土曜日の午後、省吾と牧村は駅近くのモニュメントの前で待ち合わせた。

翻意してすっぽかされる覚悟もしていた省吾の前に、牧村はあっさり現れた。

「お待たせしたかな」

「いえ、全然」

お決まりのやりとりに、

デートかよ、と省吾は一人で突っ込んで少し笑う。

「どうしたんだい」

「なんでもないです。それより買い物ですよ。娘さんお幾つなんですか」

「今年で十歳だよ。何がいいんだろうね」

想像もつかないといった風に牧村はため息をついた。

十歳か、と省吾は思案する。

洋服なんかは趣味が分からないと失敗するし、

ドールハウスという歳でもないだろう。

高級文房具なんかはもう少し歳を重ねてからだろうか。

それに高価すぎてもいけない気がする。だとすると……。

「髪留めなんかどうですか」

「髪留め？」

「女の子なら好きかと思って。

少し大人びたアクセサリとか喜ぶ歳じゃないですかね。

趣味を外しすぎる心配も、まあ服なんかよりは少ないし」

「なるほどね、探してみよう」

牧村の同意を得て、何処に行けばいいか二人は歩きながら相談する。

女性向けブランドのことなどお互い知るはずもなく、

自然と百貨店ということで落ち着いた。

アクセサリー売場に男二人で乗り込むのは勇気が要ったが、

入ってしまえば案外すんなりことが運んだ。

百貨店の店員さんはさすがプロだ。

娘の誕生日プレゼントだと言えば、

人気があり手頃な価格の品物を

いくつか見繕ってくれた。

あとは牧村の記憶と勘を頼りに、娘が気に入りそうなものをチョイスする。

イミテーションの青い輝石のついたピン留めだ。

ラッピングされた品物を受け取り店を出た省吾は、

すんなりミッションを完遂できたことに安堵の息を吐いた。

「君のお陰で助かったよ」

「いえ、喜んでもらえるといいですね」

「ああ、ありがとう。それにしても君は慣れているのかい」

「慣れって？」

「いや、女の子のプレゼントを選ぶことにさ。

なんだか慣れている感じがしたから、モテるんだろうなと思って」

「ははは、だったらいいんですけど。もう何年も独り身です」

「それは意外だ。でも君は魅力的な青年だから、すぐにいい人が見つかるよ」

「期待しときます」

時計を見ると、時刻はまだ夕方に差し掛かった頃だった。

「これからどうしますか」

あわよくば、この後撮影できたらと思って省吾は声をかける。

しかし牧村は眉根に皺を寄せて申し訳なさそうに答えた。

「悪いが、明日を考えるとガラにもなく緊張してしまっただね。

早めに休みたいから、今日は失礼してもいいだろうか」

そう言われてしまっただは、引き留めるのも憚られた。

一瞬シュンとしてしまったが、慌てて笑顔を作った承する。

「もちろんです。明日はどうする予定なんですか」

「今日と同じ時間に、隣町の水族館で待ち合わせだよ」

「ああ、俺も行ったことがあります。イルカショーがおすすめですよ」

昔、取材で訪れたときの記憶を頼りに、省吾はアドバイスした。

訓練されたイルカのジャンプは圧巻の一言で、

小学生の女の子なら、きっと気に入ると思う。

「そうかい、じゃあ観てみるとしよう。娘次第だけどね」

「ええ、娘さんが楽しめるよう祈ってます」

「終わったら連絡するよ。それから撮影に行こう」

そう約束して別れた後、省吾は一人、昨日の定食屋で唐揚げ定食を食べた。

ふとした拍子に、がっかりしている自分に気付く。

ああ、今日の夕飯も彼と一緒に went かったんだなあと、
省吾はそのときになって自覚した。

「俺、何やってるんだろう」

帽子を目深に被り、ファインダーを覗きながら省吾は一人ごちる。
目の前のプールでは飼育員の笛の音に合わせてイルカが跳ね、
宙吊りにされた輪をくぐる。その度に客席から大きな拍手が起きた。
省吾はイルカを撮影しているふりをしながら、
望遠モードにしたカメラで向かいの客席から牧村の姿を探す。
この水族館では午後のイルカショーは一回きり。
省吾は必ずいるはずだと信じてカメラを左右にゆっくりと向けた。

「あ、いた」

階段状になった客席の中程、イルカが跳ねて生じる水しぶきが掛からない
ギリギリのところ、二人は陣取っていた。牧村と、娘だ。

(俺、ほんと何やってんだ……)

思わず溜息が溢れた。
まるでストーリーじみたことをしていると自分でも分かっている。
それでも心配だったのだ。牧村が彼女にきちんとプレゼントを渡せているか。
余計なお世話だということは重々承知だが、
プレゼントを選ぶ手伝いまでしたのだ。見守るくらいしてもいいだろう。
そう自分に言い訳をしてファインダーを覗く。
向かいで楽しそうに笑う彼らを中心に捉えて、
省吾はこっそりシャッターを切った。
娘と思しき少女の髪には、青い輝石が輝いていた。

心配する必要なかったな。と省吾は安心し、
ついでとばかりにイルカの勇姿をいくつか写真に収め、
ショーが終わっても暫く息を潜めて動かずにいた。
出口で鉢合わせでもしてはたまらない。
牧村達が退出したことを確認してから、
係員に追い出されるように、その場を後にした。
ショーの会場を出たところは、水族館の順路の丁度中程で、

省吾は残りの水槽を一人でゆっくりと見て回った。
彼らが楽しそうにしているのなら、自分の出る幕はない。
それにしても牧村はなぜ離婚したのか、
ずっと質問できなかった言葉がぐるぐると脳内を回る。
そうこうしているうちに、水族館の出入り口ホールに戻っていた。
ゲートを抜けて、外の空気を肺いっぱい吸い込む。
空にかかる夕焼け雲は美しく、省吾は慌ててカメラを構えた。

「どうして君がここにいるのかな」

そう牧村の声が聞こえたのは、シャッターを切ったのとほぼ同時だった。

慌てて振り向くと、牧村が笑っている。

「いや、そろそろかと思って迎えに来たっていうか」

「イルカショーのときに君もいたじゃないか」

口をついて出た言い訳は、あっさり牧村に否定された。

「気づいてたんですか……」

「言っただろう。その大きなカメラは目立つって」

前にも聞いた台詞と指先のカメラ。

省吾は覚悟を決めて「ごめんなさい！」と頭を下げた。

「別に盗み見しようとしてたわけじゃなくて、

いや、結局は盗み見してたんだけど、

単に心配だったっつーか何っつーか」

嫌われまいと、しどろもどろになりながら言い訳を繰り出す省吾に、

「別に怒ってやしないよ。心配してくれたというのも本当だろう」

と、牧村は柔らかく応えた。

懐の大きさは、年の功だろうか。

声音の優しさに安心し、省吾は顔を上げる。

「それにしても、君は暇なのかい？」

「いつもの休みはこんなことしませんよ！

ジムに行ったり、自転車で撮影旅行したり、先週は山も登ったし」

「本当に？ 若いな君は。平日も仕事であちこち行っているんだらう？」

「まあ取材でなら、それなりに。基本は動きっぱなしです」

「昨日までは犬か何かのようだと思っていたけれど、

君は犬というよりまるで魚だな」

「魚？」

「ああ今日もいただろう、マグロやカツオなんかの回遊魚。

動き回ってないと生きていけないんだ。

君はなんだか、そんな感じがする」

「あ、酷いな、それ」

二人で笑って、どちらからともなく駅に向かって足を踏み出した。

夕日に向かう方角だった。

あまりの眩しさに目を細めて、ゆっくりと歩く。

「君は聞かないんだね」

そう切り出したのは牧村の方だった。

「え？」

「離婚の原因をさ」

「そんなデリケートな話題、昨日今日でできませんよ」

気になってはいたが、流石にそこまで踏み込めない。

それは省吾の正直なところだった。

「君は本当に良い子なんだな」

別に普通だ、と省吾は思う。

それに良い子なら、黙ってここに来たりしない。

省吾が何も答えずにいると、

牧村は安心させるように「別に大したことじゃないんだよ」と続けた。

かと思うと軽く頭を振り、言い直す。

「いや、大したことだな。私は妻を上手に愛せなかったんだ。

「愛せないことに、結婚するまで気づかなかった。

彼女には本当に悪いことをしたよ」

「どうしてそれを俺に？」

「さあ、誰かに言いたい気分だった。それだけだよ」

駅に着いたのは、ちょうどその時だ。

牧村は話を切り上げて、路線図を見上げる。

「それで、どうしようか。食事の写真だったかな」

「あ、はい。飲食店だと撮影許可とか必要になってくるので、

許可がすぐ下りるところか、最悪テイクアウトとか」

もちろん昨日のうちに許可を貰うことも考えたが、

省吾としては、今日の時の牧村の気分に合わせた食事をと考えていた。

その時、食べたいものを食べている表情が一番いいはずだ。

「ああ、そうか撮影許可か」

それは考えていなかったと牧村は暫く思案し、

「だったら私の家に来るかい」と提案した。

「簡単なものなら作れるし、撮影許可も今出そう」

「お邪魔してもいいんですか」

「構わないよ。これでも君を信用しているからね」

そう言われて、省吾は自分の胸が弾んでいることに気付く。

彼の言葉に喜んでいるという事実に、省吾は自分でも驚いた。

「手料理には少し自信があるんだ。何かリクエストはあるかな」

「うーん、じゃあ魚」

努めて落ち着いた声で、省吾は答える。

「いいね。私も食べたいと思っていたところだ」

これは恋だろうか。

男、それも年上のおっさん相手に？

省吾は一人、自問する。

しかし答えは今出なくてもいい。

今、恋じゃなくともいずれ恋になるだろう。

省吾は確信めいた予感を抱く。

何せ、自分は魚のような男らしい。

そして出会った時に言っていた通り、

この男は、魚の骨抜きが得意なのだ。